

脳血管障害者の回復過程における共通体験

酒井 郁子¹⁾、菊池 祥子²⁾

要 旨

脳血管障害をもった人の闘病手記7冊をデータとして、脳血管障害者の共通体験を探索した。その結果、〈生きのびる〉〈困難の自覚〉〈回復の自覚〉〈生命感情の復活〉〈外にでる〉〈壁にぶつかる〉〈継続性の断絶〉〈人生の底をのぞく〉〈転回〉〈自分探し〉〈自分を許す〉〈ゆるくなる〉〈障害とともにある〉〈生きなおす〉の14項目の共通体験が得られた。この項目を時系列に整理し、脳血管障害者の回復過程における共通体験の変化について考察を加えた。

キーワード：脳血管障害者、回復過程、共通体験

1. はじめに

脳血管障害者は、突然の発症と身体運動機能や精神機能の機能障害によってそれまでの生活に大きな変化が起こる。また急性期の救命治療、リハビリテーション、障害を持ちながらの在宅生活や職業生活などその回復過程において様々な出来事を体験する。

脳血管障害は生活習慣によるものが大きい。つまり脳血管障害者はその発症前から脳血管障害となる人生、そしてなった人生を生きるということもできる。脳血管障害者が立ち直る過程においては生活の制限を広げ、個人の人生の編みなおしをする必要がある¹⁾。障害を得て、葛藤し、障害を受け入れる過程は脳血管障害からの立ち直りの過程であり、その人が自分の人生を編みなおす過程でもある。

発症から立ち直りの過程における体験は、それまでの人生から影響を受け、またその後の人生を左右する体験であろう。この体験を看護者が理解することは、脳血管障害者がどこからきてどこにいくのかを理解することであり、援助の方向性を見いだす上で重要である。これまでこの体験は障害受容と呼ばれ、数々の段階理論に当てはめられ演繹的に述べられてきた²⁾。一方それでは限界があることも指摘されている³⁾。また大川は脳血管障害者の回復過程における共通体験のうち、リハビリテーションを受けている時期の援助をどう認識しているかについて探

索している⁴⁾。しかし発症から社会復帰までの立ち直りの過程全般における脳血管障害患者の共通体験を探索した研究は見られない。

そこで本研究では、脳血管障害患者の闘病記をデータとして、それぞれの著者の体験、およびその変化を分析する。そして著作に表現されている認識や行動を分析し脳血管障害患者の共通体験を探索することを目的とする。

2. 研究方法

1) 研究対象（表1）

脳血管障害を発症し、何らかの障害が生じ、リハビリテーションを経て社会復帰を果たした経過が本人によって記述されている叙述録のなかで現在入手可能な書籍を研究対象とした。

著者は6人で全員男性だった。全員が職業復帰を果たしたうえで、執筆をしている。対象書籍は7冊だった。

2) 分析方法

それぞれの著作を何度もよみ、文脈を把握した。つぎにそれぞれの著者の体験、認識を文脈に沿って取り出し、時系列に整理した。そして患者の背景やそのときの出来事などを記入した。

つぎに著者別に障害に関わる体験を表す文章を抜き書きし、共通している体験をまとめ、その体験に研究者が名前をつけた。この名付けられた体験を、今回取り出された脳血管障害患者の共通体験とした。またこの共通体験を時系列に従って整理し、そ

1) 川崎市立看護短期大学

2) 神奈川県立看護教育大学校

表1 対象書籍

番号	著者名	書名	出版社	発行年
①	永倉万治	父帰るー平成元年大熱血闘病記ー 大回復ー脳溢血患者の爽快 ・熱血リハビリ記ー、	角川文庫 講談社	1997. 1997.
②	牧太郎	新聞記者で死にたい ー障害は「個性」だー	中公新書	1998.
③	田中良太	私の脳卒中体験 ー自己流リハビリは楽しかったー	同時代社	1995.
④	西勝人	脳卒中から始まった ーあるインジニアの生還プログラムー	新潮社	1995.
⑤	遠藤晃	「脳幹出血」闘病記 ー意識不明「重体」入院から 大学教壇復帰まで	自治体研究社	1996.
⑥	千秋実	生きるなり	文藝春秋社	1989.

の変化についても分析を加えた。

3. 結 果

1) 脳血管障害患者の体験記に述べられていた共通体験

7冊の著書の分析の結果、〈生きのびる〉〈困難の自覚〉〈回復の自覚〉〈生命感情の復活〉〈外にでる〉〈壁にぶつかる〉〈継続性の断絶〉〈人生の底をのぞく〉〈転回〉〈自分探し〉〈自分を許す〉〈ゆるくなる〉〈障害とともにある〉〈生きなおす〉の14項目の共通体験が得られた。(表2) 以下「」のなかは共通体験の具体例を著作からの直接引用で示したものである。それだけでは文脈が捉えられない場合は研究者が()のなかに言葉を加え理解しやすいように表現を配慮した。また「」の中の文章の末尾の番号は表1の著書名と対応している。

〈生きのびる〉

この体験は「おぼえていない。①」「流動食でありふつうなら情けない正月であるが最高にうまい④」「脳の手術をされたと聞いてもそれが大変なことだとは思わない。⑥」などと表現された。本人にとっては、生存に向かって身体機能のすべてが活用されている体験ともいえる。このような体験を〈生きのびる〉とした。

〈困難の自覚〉

〈生きのびる〉ことができ、周囲の状況や自分の状況が把握できてくると、「自分の状態がいかに大変なのかよく分かる。①」と脳血管障害による身体の状態の変貌を自覚し始める。そしてそのようなときに「言語療法士による、執筆活動って

いうのはほとんど無理という言葉に対し、傷つき落ち込む。初めて深刻な不安。絶望と怒り。①」「愕然、何もしゃべれないのだ。正確に発音していないのだ。言葉を失いかけている。②」と自分の障害が自分の人生や生活にどのような影響を持つのかをはじめて突きつけられ、不安や怒り、絶望を感じている。また動けないことについて「いらいらする。なんとかうつぶせになって本を読みたい。大病にかかったやり場のない怒り。③」「手足がこんなに動かないことに今まで気づかなかったことにあきれる。赤子になってしまった。④」「健康な人には何の苦勞もいらない動作もやっかいな作業。⑤」と欲求不満がつのったり「俺はこんなことも分からなくなってしまっって一生ばーになったらどうしようとひたすら恥じ入る。⑥」「何も分からなくなった。ショックの連続。言語療法ではダメージの追い打ち。⑥」身体運動機能や認知機能、言語機能などの障害を自覚し衝撃を受けている。このような体験を〈困難の自覚〉とした。

〈回復の自覚〉

困難さを自覚する一方で彼らは「歩くことがこれほどすばらしいものか、大きな一步。①」「待ち望んでいた(歩行)長い入院生活の中で一番明るい歴史的な日。②」「車椅子でなく、歩行の練習であることの幸せが身にしみる。③」と身体運動機能の回復を歩行が可能になったことから感じ取りうれしく思ったり、「初めて文章を書きこれほどうれしかったことはない。①」「あとかきの

完成、何とか銭のとれる文章がかけた。②」と自分の職業的な能力の回復を自覚したりする。また「少しずつ（回復の）小さな喜びを発見。①」「自分の能力が回復し行動半径が広がることへの喜び。③」「日に日に良くなっていくのがわかり実に充実した日々。④」「自分が感じ取ることできた回復、これは奇跡のような事態。⑤」「どんどん回復しているという証拠を突きつけられだめだめとばかりいってられない。⑥」と身体機能や能力が立ち直っていく過程を自分の体で感じとっていく。自分の努力に見合った回復速度であるかのように感じ「やればできる。少しずつでも進歩する。⑥」と思ったりもする。このような体験を〈回復の自覚〉とした。

〈生命感情の復活〉

生きのびることができ、困難や回復を自覚する体験をすると、ある時ふと生きていてよかった、生きているんだと強烈に感じるときがある。「生きていることを心の底から感じることができた。生の側に落ちた喜び。①」「助かって良かった。②」「倒れる、こわいといつも無我夢中だったのにうれしい。生きている喜び。④」「生きて再び太陽を仰ごうとは。生きていて良かった。⑤」「生きて帰れた。我が家はいいなあ。⑥」などと表現される体験である。このような体験を〈生命感情の復活〉とした。

〈外にでる〉

彼らは全員が発症後に病院に搬送されているので、必ず病院から外にでるという体験をする。このことを彼らは「いざ外にでてみるとすべてのものが僕を拒否しているよう。①」「こんな姿でよく会社にきたああ情けない。②」と心理的なバリアを強く感じたり「横断歩道では途中で信号が変わり始める。ショック、現実の厳しさに落ち込む。②」と予想外の失敗体験に落ち込んだりする。「外出はやたら疲れた。恥ずかしい限り。力の衰えを想像以上のものと知る。③」と疲労感を感じ、今までの回復の自覚が帳消しになるような思いを味わう。このような体験を〈外に出る〉とした。

〈壁にぶつかる〉

外に出ていくのと前後して、いくら訓練しても「言葉がでない①」と感じたり、「長くたっていられない③」ことを自覚したりして、「これではリハビリは長く続きそうだ。④」「ここまでのこの病院の限界④」と今までのような回復の自覚を得

られない事を感じる。また身体の回復が平坦になるにつれて「単調な訓練に興味をもてない。悩む。⑤」「何をしたいのかわからない②」と訓練のやり方に疑問を持ったり悩んだりする。「動作が万事スローなのがしゃくに障る。もっともっと体を鍛えなければ。」「このままではおれはかたわになってしまう。⑥」と焦りを感じたりする。このような体験を〈壁にぶつかる〉とした。

〈継続性の断絶〉

外に出たり壁にぶつかる体験をするうちに、「40年間で培った自分が消えてなくなるような気分①」という気持ちを抱き、「脳卒中前と脳卒中後②」「これまでは働くこと＝善だったのに、会社は、仕事＝悪、働き過ぎ＝悪という価値観を押しつけてくる②」と実は自分が発症前と違う世界にいることに気づく体験をする。それはまるで「勤め先に居場所なし②」「これから退院してどう生きていくのか④」という不安定な身の置き所のない感じである。「リハビリ訓練をいくらがんばっていても病気以前と全く同じ状態にもどれない⑤」と気づいたり、「かつての理想像は私が20年という身体に染みつくほどの歳月をかけて作り上げてきたもの。(略)数ヶ月にわたって苦吟を続け、かつての理想像に別れを告げる⑤」「倒れる前は俳優としての自分に自信満々。覚えのいいのが取り柄であった。しかし（今は）人として劣っている。役者として完璧ではない。⑥」と発症前の自分とは違う自分となっていること、戻れないことを実感する。これはそれまで築き上げてきた仕事や生活がとぎれる体験である。このような体験を〈継続性の断絶〉とした。

〈人生の底をのぞく〉

「毎日つらい、暗い底へ落ち込んでいくような気持ち①」や「自殺願望②」を感じたり「何ともいいようなない焦燥感④」を感じる著者がいた。また「夢も希望もなくなった。もう俺はだめだ、死にそうだ、助けてくれとうめくばかり⑥」「しゃべるのも小声で最小限度。うつむいて縮こまってしまう。⑥」とはっきり鬱の状況が記述されたものもあった。このような状態を〈人生の底をのぞく〉体験とした。

〈転回〉

継続性の断絶や人生の底をのぞく体験のあとに、「金をかせぐこととは関係ない仕事がある。

表2 脳血管障害患者の共通体験とその具体例

生きのびる

おぼえていない。①
流動食でありふつうなら情けない正月であるが最高にうまい④
脳の手術をされたと聞いてもそれが大変なことだとは思わない。⑥

困難の自覚

自分の状態がいかに大変なのかよく分かる。①
正確に発音していないのだ。言葉を失いかけている。②
失語症は絶対治らないといわれ、こころはずたずたに傷つけられた。②
いらいらする。なんとかうつぶせになって本を読みたい。③
手足がこんなに動かないことに今まで気づかなかったことにあきれ。赤子になってしまった。④
健康な人には何の苦勞もいらない動作もやっかいな作業。⑤
俺はこんなことも分からなくなってしまって一生ばーになったらどうしようとひたすら恥じ入る。⑥

回復の自覚

少しずつ小さな喜びを発見。①
初めて文章を書きこれほどうれしかったことはない。①
あとがきの完成、何とか銭のとれる文章がかけた。②
待ち望んでいた（歩行）長い入院生活の中で一番明るい歴史的な日。②
自分の能力が回復し行動半径が広がることへの喜び。③
日に日に良くなっていくのがわかり実に充実した日々。日常生活のたいていのことは右手と口でできるようになる。④
自分が感じ取ることのできた回復、これは奇跡のような事態。⑤
喜んだり落胆したりしながら、退院が近づいていることが分かったと冗談もでる。
どんどん回復しているという証拠を突きつけられだめだめとばかりいってられない。⑥

生命感情の復活

生きていることを心の底から感じる事ができた。①
助かって良かった。②
未来は本質的に明るい。③
倒れる、こわいといつも無我夢中だったのにうれしい。生きている喜び。④
生きて再び太陽を仰ごうとは。生きていて良かった。⑤
生きて帰れた。我が家はいいなあ。⑥

外にでる

いざ外にでてみるとすべてのものが僕を拒否しているよう。①
車椅子で会社に行く～職場の第一印象は少なくとも感激。しかし自分の席さえなく失意のどん底。～こんな姿でよく会社きたああ情けない。②
横断歩道では途中で信号が変わり始める。ショック、現実の厳しさに落ち込む。②
外出はやたら疲れた。恥ずかしい限り。力の衰えを想像以上のものと知る。③
張り切って外出したが、自分でできえようとするこもまごまご、よく知っている店も間違っ入れない。頭脳の働きが悪いという観点は全くなく、体力が弱っているせいだと思う。⑥

壁にぶつかる

言葉がでない～無口になんぞなりたくない。①
何をしたいかわからない②
長くたっていられない③
これではリハビリは長く続きそうだ。④
こままでがこの病院の限界④
単調な訓練に興味をもてない。悩む。⑤
動作が万事ｽﾛｰなのがしゃくに障る。もっともっと体を鍛えなければ。⑥

継続性の断絶

40年間で培った自分が消えてなくなるような気分①
自分の居場所も分からなくなってしまう①
脳卒中前と脳卒中後、これまでは働くこと＝善だったのに、会社は、仕事＝悪、働き過ぎ＝悪という価値観を押しつけてくる。
勤め先に居場所なし②
これから退院してどう生きていくのか④
先行き不透明な我が身を考える④
リハビリ訓練をいくらがんばってみても病氣以前と全く同じ状態にもどれはしない⑤
かつての理想像は私が20年という身体に染みつくほどの歳月をかけて作り上げてきたもの。そうした像の転換は容易ではない。
数ヶ月にわたって苦吟を続け、かつての理想像に別れを告げる⑤
倒れる前は俳優としての自分に自信満々。覚えのいいのが取り柄であった。しかし人として劣っている。役者として完璧ではない⑥。

人生の底をのぞく

毎日つらい①

暗い底へ落ち込んでいくような気持ち①

自殺願望②

何ともいいようのない焦燥感④

先のことを考えると例外なく落ち込む⑥

夢も希望もなくなった。もう俺はだめだ、死にそうだ、助けてくれとうめくばかり⑥

しゃべるのも小声で最小限度。うつむいて縮こまってしまう。⑥

転回

金をかせぐこととは関係ない仕事がある。②

組織のためでなく自分のための原稿を叩こう②

自然に歩くのではなくスムーズに歩くというパフォーマンスをしていた。③

長い間人生の競争に眼を奪われ突っ走ってきた。④

この2年間で失ったものは教育と研究の機会。では得たものは何なのか。⑤

真のかっこよさは真剣に立派に生きている人間にあり、見かけにあるのではない。⑥

自分探し

(行方不明から父親に対して) 脳卒中で倒れ生死の境をさま迷ってからおやじに会いたいと熱望するようになった②

自分は田舎に育ちほんとうに勉強するなら独学しかないことをからだで学んだ。③

生まれ故郷の北朝鮮のメイファーズという考え方が自分の人生観を作っている。それは災害をいったんあきらめて受け入れるがそこから乗り越えて生きていく思想。④

20年間も教員をやり学生諸君とともに努力を重ねて作ってきた理想的な教育スタイルがある。病気を治そうと思うとその理想的なスタイルを目指してしまう。⑤

倒れる前は元気に任せて仕事をしすぎた。乱暴な暮らし方だった。⑥

自分を許す

昔と同じというわけにはいかないが味わいがあるとおもえなくもない①

やりたいことをなんでもやれば何らかの反応がある。それが人生②

発病のバランスシートはプラス。病気による能力のマイナスはゼロに等しい。③

麻痺の手足と正常な手足の2つの実験材料をもったわたしは障害者と観察者の一心同体である。④

得たものは人間が持っている奥行きの深さは場の広さを分かってきたこと。⑤

一般的にいう再起したという気持ちにやっとなれた。⑥

両手足を失っても舞台上に立っていた役者さんは立派だった⑥

ゆるくなる

だんだん平気になる①

旨くやろうと思わずなんでもやってみよう①

どうなってもいいシステムという思想でいろいろと挑戦①

組織にいるようでいない様にいいかげんに生きるゆるみを持つ必要がある②

じっくり回復を目指す③

無理をしなくなった④

理想像は所詮手の届かぬ教員像であり、そういうものを目標に訓練に励んでも疲れるだけ⑤

頭も身体も完全でなくともその時を逃がしてはいけない⑥

格好悪くてもなんでも立ち上がりさえすればよい⑥

障害とともにある

ゆっくりと歩くことの楽しみを発見①

倒れる前にやれなかったこともできた①

脳卒中になったからこそ、僕は他人より早くゆるみある新聞記者になれた②

遅く歩くようになって草花に目がいく。身体が不自由になった分、心は活躍してくれ、発病前より数倍生活が豊かになった④

病気以前に比べると同様に講義をしていても内容は確実に違ってくるに相違ないと確信を持っている。⑤

人間の本質をつかんで細かい技法にとらわれない芝居をできないはずはない。⑥

生きなおす

一つ一つを再体験して自分のやり方をもう一度発見するしか道はないのだ。①

ゆるみある新聞記者で再出発しよう。②

それまでの生活から脱皮した第2の人生をスタートさせたい。③

わたしには脳の秘密を解き明かすヒントを探る使命がある。それがライフワーク④

新しい理想像への転換はその後の自分の生き方にとって実に大きな意味を持つ。自分が病氣以降の第2の人生をこれから歩んでいくのだということを明確に決意しその事を自分自身にも言い聞かせたということ。⑤

どこまであがっていきけるかわからないが一步ずつあがっていく。⑥

②」「組織のためでなく自分のための原稿を書こう②」と自分の仕事の目的を、金や組織のためから自分のためと変更したり、「自然に歩くのではなくスムーズに歩くというパフォーマンスをしていた③」「真のかっこよさは真剣に立派に生きている人間にあり、見かけにあるのではない。⑥」と見かけにこだわっていた自分に気づく体験をしていた。また自分の人生について「長い間人生の競争に眼を奪われ突っ走ってきた。④」と気づいたり「この2年間で失ったものは教育と研究の機会。では得たものは何なのか。⑤」と自分の人生について考え始めたりもしている。このような変化のきっかけをつかんだり、気づいたりする体験を〈転回〉とした。

〈自分探し〉

著者によっては、脳血管障害になったことをきっかけに自分の生まれから今までの人生を振り返っている。たとえば「(行方の分からない父親に対して)脳卒中で倒れ生死の境をさまつてからおやじに会いたいと熱望するようになった②」とこのあと具体的に父親探しを始め、自分がどのようにして生まれてきたが突き止め「安心した②」著者もいる。「自分は田舎に育ちほんとうに勉強するなら独学しかないことを体で学んだ。③」「生まれ故郷の北朝鮮のメイファーズという考え方が自分の人生観を作っている。それは災害をいったんあきらめて受け入れるがそこから乗り越えて生きていく思想。④」と自分をささえてきた信念や思想を振り返って確認し、現在の自分の対処行動を支持したり「20年間も教員をやり学生諸君とともに努力を重ねて作ってきた理想的な教育スタイルがある。病気を治そうと思うとその理想的なスタイルを目指してしまう。⑤」と自分が療養するときの姿勢についてを自分の生き方に重ね合わせて考察している著者もいた。あるいは「倒れる前は元気に任せて仕事をしすぎた。乱暴な暮らし方だった。⑥」「こうなったのは体力を過信した自分のせい。(略)40すぎたら(略)何を言われても寝ること、ほくはそれを軽んじていた。①」と発症前のライフスタイルを振り返ったりしていた。このような体験を〈自分探し〉とした。

〈自分を許す〉

脳血管障害による生活上の困難に対処するうちに「昔と同じというわけにはいかないが味わいが

あるとおもえなくもない①」「麻痺の手足と正常な手足の2つの実験材料をもったわたしは障害者と観察者の一心同体である。④」と障害を持つ自分に対して肯定的になったり、「発病のバランスシートはプラス。病気による能力のマイナスはゼロに等しい。③」「得たものは人間が持っている奥行きの深さは場の広さを分かってきたこと。⑤」と失ったもののほかに障害によって得たものに眼をむけたりしている。「やりたいことをなんでもやれば何らかの反応がある。それが人生②」と自分の人生に向かっていうことができたり「一般的にいう再起したという気持ちにやっとなれた。⑥」と感じ、自分の障害を考えたときに「両手足を失っても舞台に立っていた役者さんは立派だった⑥」と思うことができたりする。このような体験を〈自分を許す〉とした。

〈ゆるくなる〉

自分を許すのと前後して、著者らは脳血管障害による生活上の困難について障害の程度自体は変わらないのに、「だんだん平気になる①」と感じる。それは失敗体験をおそれない余裕でもある。結果的に「旨くやろうと思わずなんでもやってみよう。どうなってもいいシステムという思想でいろいろと挑戦①」「組織にいるようでいない様にいいかげんに生きるゆるみを持つすべが必要②」「頭も身体も完全でなくともその時を逃がしてはいけない。格好悪くてもなんでも立ち上がりさえすればよい⑥」と障害を持ちながら社会と関わっていくための方法論を体得したり、「じっくり回復を目指す③」「無理をしなくなった④」「理想像は所詮手の届かぬ教員像であり、そういうものを目標に訓練に励んでも疲れるだけ⑤」と療養過程や訓練に対する姿勢にも自分なりのペースができてくる。このような体験を〈ゆるくなる〉とした。

〈障害とともにある〉

ゆるくなる体験と前後して、「ゆっくりと歩くことの楽しみを発見①」「遅く歩くようになって草花に目がいく。身体が不自由になった分心は活躍してくれ、発病前より数倍生活が豊かになった④」と脳血管障害を持ったからこそ新しく得られたライフスタイルに確信をもつ。また自分の仕事について「倒れる前にやれなかったこともできた①」「脳卒中になったからこそ、僕は他人より早くゆるみある新聞記者になれた②」「病気以前に

図1 脳血管障害患者の回復過程における共通体験



比べると同様に講義をしていてもゼミなどの指導に当たっていてもそれらの内容は確実に違ってくるに相違ないと確信を持っている。⑤「人間の本質をつかんで細かい技法にとらわれない芝居をできないはずはない。⑥」と障害をもつことが自分の仕事にプラスになることを実感する。このような体験を〈障害とともにある〉とした。

〈生きなおす〉

今までの体験をしてきて著者らは著書のおわりのほうで以下のように述べている。「一つ一つを再体験して自分のやり方をもう一度発見するしか道はないのだ。①」「ゆるみある新聞記者で再出発しよう。②」「それまでの生活から脱皮した第2の人生をスタートさせたい。③」「自分が病気以降の第2の人生をこれから歩んでいくのだということを明確に決意しその事を自分自身にも言い聞かせたということ。⑤」このように“第2の人生”の“再”出発の決意を述べ、「わたしには脳の秘密を解き明かすヒントを探る使命がある。それがライフワーク④」「新しい理想像への転換はその後の自分の生き方にとって実に大きな意味を持つ。⑤」「どこまであがっていけるかわからないが一步步あがっていく。⑥」今後の人生の方向性を見いだしている。このような体験を〈生きなおす〉とした。

4. 考 察

1) 脳血管障害者の共通体験の構造

脳血管障害者の共通体験の構造を時系列に整理すると図1になる。

発症から退院までの体験は、〈生きのびる〉から〈外にでる〉までである。〈生きのび〉て〈生命感情

の復活〉を体験することがその後の回復過程を支えていると考えられる。つまり〈外にでる〉ときに現実の厳しさに衝撃を受けたとしても、また努力を続けられるのは生きている喜びを感じるという体験に支えられていると考えられた。

また入院中から〈継続性の断絶〉をすでに感じたり〈人生の底をのぞく〉体験をしている著者もいれば、過程や職場に復帰してからこのような体験をしている著者もいる。時期はまちまちであるが生活の〈困難の自覚〉だけではこのようなつらい体験にはならない。障害によって自分らしさが失われたと感じたとき、〈継続性の断絶〉がおり、人によっては〈人生の底をのぞく〉体験をすると考えられた。

このように混乱し苦悩している著者たちに、〈転回〉が起こる。〈継続性の断絶〉がおり〈人生の底をのぞく〉から〈転回〉という新しい生き方の方向性を見出すともいえる。〈自分探し〉〈自分をゆるす〉は〈転回〉の後に起こる体験である。この体験は、脳血管障害になるべくしてなった自分に気づく体験でもある。著者によっては自分の父親探しまでさかのぼる。あるいは自分の故郷の考え方に行き着く著者もいる。ここをじっくり体験し自分なりに納得しふに落ちることで、なぜこの病気になったのかその意味を自分なりに考え見いだすことができると考えられる。そして肯定的な意味を見出したとき〈障害とともにある〉事ができるようになるのではないかと考えられる。それとともに著者らの生活は〈ゆるくなる〉のである。

これらの体験を経て〈生きなおす〉決意が生まれる。〈生きのびた〉命は、主体的に〈生きなおす〉人生となるのである。

2) 看護への示唆

脳血管障害の回復過程における立ち直りの体験は、脳血管障害を得た自分を探すという辺境の旅のようなものである。地図があれば役に立つだろうが、一步一步足を運び道をゆくのは脳血管障害を得たその人本人であり、自分の体験の中で悪戦苦闘しながら進んでいくものである。そのとき身体の回復のみを目指したかわりをしては、患者が人生を編み直すことを援助することは困難である。

看護者が一人の人の体験すべてに関わることはできないが、今患者がどのような体験をし、今後どのような体験をするかという見通しをつけることは大切である。その人がどこからきてどこにいくのかを理解していれば、その人のためのよい方向を見いだすことができるからである。その人の回復過程の道筋を見いだすことができれば、その人に沿った援

助を提供しやすくなると考えられる。

3) 研究の限界と今後の課題

本研究は研究者自身が対象者から直接得たデータを分析しているわけではない。また著者らの障害の部位や程度などは直接アセスメントする事は困難であったが、執筆活動が可能であると言うことは、それだけ身体運動機能や精神運動機能が良いと言うことである。つまり本研究の対象は男性で、社会復帰をし執筆活動ができる程度に良好な回復をした脳血管障害者に偏っている。今後は直接観察や面接を通してデータ収集をして今回の研究結果と比較すること、および障害が重度であったり、言語機能や精神機能の障害をもつ人の体験についても探索し体験に影響する要因を見いだすことが課題である。

文 献

- 1) ビエールウグ編、黒江ゆり子、市橋恵子、實田穂訳：慢性疾患の病みの軌跡、コービンとストラウスによる看護モデル、P16、医学書院、1995。
- 2) 本田哲三、南雲直二、江端広樹、渡辺俊之：障害受容の概念をめぐって、総合リハビリテーション、22 (10)、819-823、1994。
- 3) 酒井郁子、佐藤弘美、遠藤淑美、山本広美、末永由理、小川聡子：脳血管障害を持つ患者の障害受容およびその周辺概念、臨床看護研究の進歩10、10-21、1998。
- 4) 大川貴子：“看護者の行為”に対する患者の認知、リハビリテーション病棟に入院している脳血管障害患者に焦点をあてて、看護研究28 (2)、115-132、1995。
- 5) 永倉万治：父帰る -平成元年大熱血闘病記-、角川文庫、1997。
- 6) 永倉万治：大回復 -脳溢血患者の爽快・熱血リハビリ記-、講談社、1997。
- 7) 牧太郎：新聞記者で死にたい -障害は「個性」だ-、中公新書、1998。
- 8) 田中良太：私の脳卒中体験 -自己流リハビリは楽しかった-、同時代社、1995。
- 9) 西勝 人：脳卒中から始まった -あるエンジニアの生還プログラム-、新潮社、1995。
- 10) 遠藤 晃：「脳幹出血」闘病記 -意識不明「重体」入院から大学教壇復帰まで、自治体研究者、1996。
- 11) 千秋 実：生きるなり、文藝春秋社、1989。